

JUA Newsletter for Next Uro-Generation

関東
地方版
東京

医学生・初期研修医のための泌尿器科News letter



東京慈恵会医科大学泌尿器科学教室は一九九二年に、日本で最初の泌尿器科学独立講座として誕生いたしました。九十四年の伝統と、「病気を診ずして病人を診よ」という本学の建学の精神のもとに、現在第六代目として、**顕川晋教授**が二〇〇四年四月から就任されております。総医局員数七十名を超し、ここ数年は毎年六人の新入医局員を迎えております。若い医師がとても多く、活躍の場面も増えてきております。

患者様のためになるべく低侵襲な治療を現在当教室では泌尿器腫瘍、女性泌尿器科、小児泌尿器科、神経泌尿器科の四つを診

療の柱としております。どの分野でも共通していることとして「病人を診る」という観点から、低侵襲な治療に力を入れていきます。手術は、ほとんどが腹腔鏡で行われており、日本泌尿器内視鏡学会が定めた泌尿器腹腔鏡技術認定制度の審査を受け、泌尿器科領域における腹腔鏡手術に関する技術を認定された医師のもとで、すべての腹腔鏡手術を行います。さらにより安全な手術を行うために、腹腔鏡手術に係わる医師に、鏡視下手術トレーニングコース試験が義務化されており、合格者のみが実際の手術に参加することができるとい

う独自のルールがあり、安全で技術力の高い手術を行うことを目標としています。二〇一五年の年間総手術件数は一、二四七件であり、泌尿器腫瘍から腎移植まで幅広く手術を行っています。二〇〇四年に前立腺がんに対する腹腔鏡手術が導入され、開腹移行した症例もほ

歴史を重んじ最先端の医療に挑戦していく

東京慈恵会医科大学 泌尿器科学教室

とどなく毎年百例近くの手術症例があります。腎がんに関しては、機能温存を重視し、部分切除を中心に行っております。手術以外にも前立腺がんでは、二〇〇三年に初め

て密封小線源挿入治療が導入され、現在まで一、〇〇〇件を超える治療実績を上げており日本の先駆的施設です。また新

規治療としては二〇一二年から腎がんに対して、また二〇一五年から前立腺がんに対しても凍結治療が開始されました。特に前立腺がんに対する凍結療法は本邦初であり、全国から症例が集まります。女性泌尿器科の分野では、骨盤臓器脱に対していち早く腹腔鏡下メッシュ固定術を導入し、安定した成績を残しております。難治性の間質性膀胱炎に対しても、積極的に治療を試みています。

新専門医制度に向けて二〇一七年度からの専門医制度の変更に伴い、連携施設として国立がん研究センター中央病院や国立成育研究医療センターが加わりました。大学病院だけではなかなか診療することができない悪性腫瘍はもちろん、小児泌尿器分野まで、幅広く研修することが可能となりました。また地域医療にも

力を注いでおり、関連施設は東京都内を中心に、神奈川県、埼玉、千葉、静岡と多岐にわたたり、いずれもその地域の基幹病院となっております。

日本で一番世界に近い泌尿器科当教室では、歴史に裏打ちされた膨大な臨床実績を背景に研究分野でも先進の研究活動を行っております。まず泌尿器腫瘍の分野では日本人前立腺がん患者から樹立した慈恵医大独自の新規前立腺がん細胞株を作成し、ホルモン抵抗性の機序の研究を中心に行っております。また神経泌尿器の分野では間質性膀胱炎のマーカ

の探求などが研究され、欧州や米国泌尿器科学会でも採択され、世界的にも注目を浴びております。さらに、グローバルな活躍を目指す泌尿器科の育成を目指しており、海外への学会参加や海外留学の奨励の他、国際的に著

名な泌尿器科医師を招聘し、講演会や、カンファレンスを行っております。またアジアを中心に明日の泌尿器科を担う若い医師の留学の受け入れを行ったりと、国際交流も盛んです。東京オリンピックに向けてますます国際都市として発展している東京の中心という地の利を生かし、我々東京慈恵会医科大学泌尿器科教室はその先にある教室創立百周年に向け邁進していき

たいと思います。
(慈恵医科大 小池祐介)

の奨励の他、国際的に著

名な泌尿器科医師を招聘し、講演会や、カンファレンスを行っております。またアジアを中心に明日の泌尿器科を担う若い医師の留学の受け入れを行ったりと、国際交流も盛んです。東京オリンピックに向けてますます国際都市として発展している東京の中心という地の利を生かし、我々東京慈恵会医科大学泌尿器科教室はその先にある教室創立百周年に向け邁進していき

たいと思います。
(慈恵医科大 小池祐介)

たいと思います。
(慈恵医科大 小池祐介)

たいと思います。
(慈恵医科大 小池祐介)



みなさま、こんにちは。昭和大学医学部泌尿器科学講座で医局長、講師を務めています森田順です。泌尿器科がどのような科であるか理解されている方も多いかと思われすが、今回は、これから泌尿器科医を目指す学生や研修医の皆様に、泌尿器科医の魅力、未来を改めて紹介して行きたいと思っています。

なぜ泌尿器科医を選んだのか？

私の家は泌尿器科医でも開業医でもありません。学生時代から手術に興味があった自分は、最初から外科系の診療科に進もうとは思っていません。当初は、消化器外科や産婦人科などにも悩み、いろいろと見学もしました。しかし、最終的に、臓器は限られてしまうけれど、専門領域が確立されており、良性疾患から癌、全身疾患までも扱い、手術も外来もいろいろあり、大きな可能性を秘めている泌尿器科を選びました。今では、ロボット (Da Vinci)、ラパロ、各種

内視鏡手術から大きな開腹手術や細かい小手術まで、毎週毎週様々な手術を経験しています。外来業務や病棟業務は勿論、手術室、超音波室や透視室、病院内の様々な部門にも顔を出しているのは泌尿器科です。働き始めからこれまで、これほど幅広く扱え、やりがいを感じる泌尿器科を選んだ後悔したことはありません。

泌尿器科とは泌尿器科診療のニーズは年々高まっています。

前立腺癌や他の尿路性器悪性腫瘍(膀胱癌、腎癌など)の患者数は著しい増加傾向にあります。さらに高齢化社会に伴い、前立腺肥大症や神経因性膀胱、過活動膀胱といった下部尿路症状、また尿失禁、臓器脱などのFemale Urology、尿路結石症や尿路感染症、本邦でも社会的認識の高まった男性性機能障害など泌尿器科が扱う良性疾患も増加しております。高齢化社会は着実に進んでおり、高齢患者さんを扱うことが多

い泌尿器科医の需要は年々高まっております。泌尿器科はまさしく二十一世紀を担う重要な診療科のひとつとなっております。泌尿器科は、これまで、マイナーな科として医療現場で扱われてきた経緯もありますが、世界的には、「泌尿器外科」として認識されていきます。



一方、日本でも、生活様式の欧米化とともに前立腺癌の罹患数は上昇しており、男性の悪性腫瘍の中では胃癌と肺癌に次いで患者数が最も多くなるのは確実です。このような一例を見るだけでも今後は泌尿器科医の需要も急増し、

欧米と同様に活躍する場がますます増加してくるものと予想されます。泌尿器科の魅力前立腺癌を一例に挙げましたが、泌尿器科の特徴として大きなことは、何より扱う分野が幅広いということも挙げられます。前立腺癌をはじめ、腎癌、膀胱癌、精巣腫瘍など尿路性器悪性腫瘍は、診断治療まで全て泌尿器科が行っています。排尿機能障害、EDを含む男性機能障害といったところから、年々増加傾向にある尿路結石症、尿路感染症も泌尿器科で対応しています。尿路結石症の治療には、体外衝撃波破砕術 (ESWL)、尿管鏡手術 (TUR)、経皮的腎砕石術 (PNL) など様々な治療法が選べる時代になっています。また腹圧性尿失禁や膀胱癌などの女性骨盤底外科も進歩していますし、腎不全外科的な腎移植、内シヤント造設術、副甲狀腺摘除術など慢性腎不全患者に関する治療、これも泌尿器科ですし、血液透析、腹膜透析、血漿交換などの血液浄化療法も行います。さらには小児泌尿器科疾患に対する外科的治療も行います。

泌尿器科の未来

泌尿器科の未来は、自分自身も強く思うことですが、泌尿器科のもうひとつ大きな特徴は、疾患に対する診断法、治療法が、日々、目覚ましく進歩している

分野とも言えます。腹腔鏡手術、ミニマム創内視鏡手術、ロボット支援下手術など前立腺癌や腎癌の手術だけをみても様々な方法が施行されてきています。同様に薬物療法もここ十年で大きく変化してきています。もちろんそれに伴い、様々な基礎研究や臨床研究も施行され、臨床面だけではない幅広い探究心を与えてくれます。このように泌尿器科医は、非常に幅広い領域を、内科的にも外科的にも扱う重要な科であるとともに常に新しいことにも挑戦し続けています。常に新しいことに挑戦することは大変ですが、例えば一つの手術をやり遂げた後の充実感、それを扱う泌尿器科医にしかわかりません。また、臨床と

並行しての研究、発表は大変ですが、学会が遠くであれば、それまでの苦労と引き換えに、達成感とともにご当地のいいご褒美も待っています。しかしながら、非常に高い将来性を持ちながらも日本では他科に比して、まだまだ専門医の数が少ない状況が続いています。これを読んで下さいました皆様少しでも泌尿器科に興味を持って頂き、共に切磋琢磨できる日が来ることを楽しみにしています。泌尿器科医になろう！ 待っています！ (昭和大学 森田順)



